



東山浄苑報

本願寺連枝
宇霊眞院釋尼妙観

東山浄苑報 第2号
令和6年7月1日刊
京都市山科区上花山旭山町8-1
東山浄苑東本願寺
TEL 075-541-8391(代)
FAX 075-531-1663
発行責任者
東山浄苑報編集委員

■ 台下インタビュー	1 ページ
■ 台下インタビュー 続き	2 ページ
■ 孟蘭盆会・秋彼岸会のご案内	3 ページ
■ 報恩講・歳末昏事・修正会のご案内	4 ページ
■ 東山浄苑読経御扱いのご案内	4 ページ
■ 大谷暢順研究所・記念館の活動紹介	5 ページ
■ 大谷御廟・信楽壇のご紹介	5 ページ
■ 送迎バス・休苑日のご案内	6 ページ

本願寺法主、本願留守職を継職して

「東山浄苑は私の命」

転悪成善のドラマの半生、大谷暢順台下に聞く



令和六年三月二十四日(日)、大谷暢順台下の本願寺法主、本願留守職のご継職と、長年の日仏文化活動の功績を讃え、フランス政府よりレジオンドヌール勲章・オフィシエの叙勲を祝う祝賀会が賑々しく執り行われました。

本願寺八百年の伝統に則り、私は佛祖の御冥祐(ごめいゆう)と如来の御勅命により、本願寺法主、本願留守職(るすしき)を継職しました。

さて、開山親鸞聖人は弘長二年(一二六三)十一月二十八日、京都において九十歳で往生し、東山・延仁寺で荼毘(だび)に付されました。文永九年(一二七二)、聖人の三女・覚

盛会となった法統継承式祝宴(令和六年三月二十四日)



廟堂の破却、強奪が起きます。しかし、この窮地を転悪成善したのが、覚如上人でした。覚如上人は、唯善に大谷を追い出されて都を転々とし、関東の門弟に節を屈した懇望状を送る等、苦勞の末、本願留守職を継職します。そして、この御廟を本願

信尼公(かくしんにこう)が東寺とし、後の法主職となる別当の門弟の協力を得て、夫・小野宮禪念の屋敷、現在の知恩院内にある崇泰院(すうたいいん)の大谷の地を譲り受けて廟堂を建立し、聖人の御影(ごえい)を安置しました。その後、覚信尼公は東国の門弟たちに、ここを聖人の墓所として寄進することを通達し、遠方にある門弟に代わり直接、廟堂を護持する任に就きます。

これが後の本願留守職です。留守職である覚信尼公の尽力によって、廟堂は隆盛をみますが、血族の唯円による

聖人の御教えは、覚如上人と長男の存覚上人によって体系化され、平安期以前の佛教諸宗に比肩(ひげん)する深博無涯(しんぱくむがい)の域に達します。本願寺開立の祖・蓮如上人は、魂の深奥にて御法義を吟味反芻(はんすう)、大成し、教化によって多くの門徒が生ま



れて、本願寺は我が国随一の教団となったのであります。

時を経て、東本願寺は幕末維新の動乱と廃佛毀釈の嵐の中、物心両面で大いに苦しめられました。それを乗り越えたのが、二十一世嚴如(ごんによ)上人でした。本願寺の使命を「勸学布教・学事の振興」であると明示し、両堂の再建にも着手しました。しかし、完成を見ずして、「勸学布教・学事の振興をよろしく頼む」との遺言を残し、遷化されました。

この後、内外に英明の聞こえ高き二十三世法主彰如(しように)上人は、幕末維新の苦勞・災厄が本願寺に再び到来しても持ちこたえらるとも

に、「勸学布教・学事の振興」を憂いなく果たす根本となる元資の蓄積の為、本願寺自ら布教を行い、直属の門徒を持つべきであると全国を巡化します。

さらには永代経願人、本願寺の永代の護持相続を、志納をもって願い出る者すべてを本願寺の直門徒とする手立てを考えたのです。思案の結果、その中核となる本願寺文化興隆財団を設立されました。

彰如上人は当財団設立者として、総裁に就任しました。財団に蓄積されるべき永代経収入は、設立後まもなく本山が取りこんでしまい、財団設立時の高邁な意思は、実現を見る事が出来なくなっていました。

さて、幕末の嚴如上人裏方・嘉枝宮和子女王降嫁の折、伏見宮家から賜ったこの六條山に、戦後、本願寺と大谷派は、第二の大谷本願造営を計画したのですが、頓挫し、社会問題となりました。遂に困窮の末、その善処・創建・経営を私に懇請してきたのです。

各界からの祝辞



鷹司尚武神社本庁統理



松井孝治京都市長



門川大作前京都市長



山東昭子元参議院議長

【二面に続く】